

「My Love Story」

— 2 稿 —

2026/05/16
山極 瞭一朗

〈人物表〉

和内 健作

(28)

会社員

御堂 清香

(28)

健作の恋人

垣田 雅道

(31)

健作の先輩・バー店長

吾野 麻巳子

(42)

探偵

1. 公園（夜）

川が流れる。月明かりが川面に反射している。
スマートエレガンスな服に身を包んだ男女がベンチに座っている。

和内健作（28）、御堂清香（28）である。
2人は景色を眺めている。

健作 「おいしかったね」

清香 「うん、とても」

健作 「4年記念日だからね、奮発した」

清香 「ありがとう」

と、微かに笑みをこぼす。

間。

健作、やや緊張気な面持ちで、清香の横顔を見て、

健作 「清香」

清香、不思議そうに健作を見つめる。

健作、ふつと力強く息を吐き出すと、立ち上がる。

清香の前に立つと、しゃがんで、

健作 「伝えたいことがあるんだ」

ポケットから小箱を取り出すと、清香の前に掲げる。

清香はハッとして息を呑む。

健作 「清香……」

パカッと箱を開ける。

そこには、ダイヤ輝く指輪がひとつ。

健作 「結婚しよう」

清香、思わず口元を抑える。

健作 「一緒に、幸せになりたい」

清香、何も答えられないようで……

その瞳から、一筋の雫が滴り落ちる。

健作 「ダメ……かな？」

清香 「ごめん……」

健作 「え？」

清香 「……ごめんなさい」

健作、わけがわからないようで、ゆっくりと箱を閉じる。

清香 「ずっと黙ってたことがある」

健作 「どういう、こと？」

清香、瞳を閉じて大きく深呼吸。そして決意を示すようにきっぱりと、

清香 「私、結婚してるの」

2. アパート・健作の部屋（夜）

ワンルームの部屋。

壁にはびっしりと、健作と清香のツーショット写真が貼られている。

そのどれも笑顔満載である。

健作、写真をじっと見つめている。

ダイニングテーブルには指輪の小箱。

健作、頬を歪める。拳を握りしめる。そしていたたまれなくなつて、勢いよく写真を剥がしていく。

床に散らばる健作と清香のツーショット。

健作、ガックシとその場に崩れ落ちる。ほろりと涙が滴り落ちる。

3. アパート・健作の部屋（朝）

窓から朝日が差し込む。

散らかった室内。

床に突っ伏して眠る健作、眩しさに目を覚ます。服装は昨夜のままである。

健作、頬を歪めると、室内を見渡し、ため息をつく。すると、スマホは着信を告げる。

健作、気だるそうにジャケットの内ポケットからスマホを出し、確認。

画面、「垣田雅道」とある。

4. BAR・外観（朝）

路地裏にひっそりと佇む隠れ家的店。

「CLOSED」の看板。

ゴミを啄んでいたカラスが飛び立つ。

カウンター席のみのこぢんまりとした店内。

カウンターの内側に、店長の垣田雅道（31）。が
さつに水道水をグラスに注いで、

垣田 「4年付き合っただけでもないってどうなってんだって話だ」と、一気飲み。

その左手薬指には指輪が光る。
端の席に座る健作は苦笑。

垣田 「第一なんで付き合ってたって話だけど、理由訊いた？」
健作 「いや……」

垣田 「いや、馬鹿か。え、何、じゃあ結婚してるって言われて、はいそうですかって引き下がったわけ？」

健作 「引き下がったわけ——」
垣田、食い気味に、

垣田 「じゃあ怒った？」
健作 「いえ」

垣田 「第一声、ふざけんなだろ、普通」
健作 「言えませんか……」

垣田 「つか、そもそもどんな頻度で会ってたわけ？」
徐々にヒートアップして、

垣田 「泊まりにも来てたって言ってよな？ 百歩譲ってお前が
気づかなかったとしても、旦那は——」

健作、申し訳なきそうに遮る。
健作 「すいません、質問、多くて」

垣田、ふと我に返り、
垣田 「すまんすまん。普通に意味わかんなくて」と、左手薬指の指輪に触れる。

健作 「俺も、普通に意味はわかんないです」

垣田 「連絡は？」
健作、力なく首を左右に振る。

垣田 「お前からは？」
健作 「何て送ればいいかわかんなくて」

垣田 「女々しいな。いかにも今時の男って感じだな。世代を感

じるわ」

健作 「3個しか変わらないです」

垣田 「中1のとき、高一よ。世界が違うだろ」

健作、苦笑。

垣田 「で、どうすんの？ このままでいいのか？ お前の恋はここで終わりか？」

健作、その頬を苦しそうに歪める。

垣田 「彼女のこと知りたい。けど直接訊けないってなら、協力してやる」

健作、思わず顔をあげ、垣田を真っ直ぐに見つめる。

6. 探偵事務所・応接室（昼）

高級インテリアで揃えられた室内。

壁に設置されたモニター、「吾野探偵事務所」を紹介するCMがループ再生されている。

健作、どこか落ち着かないようで、ソファに浅く座っている。

キャリアウーマン風の探偵、吾野麻巳子（42）、早歩きで入って来て、

麻巳子 「お待たせしました」

健作、咄嗟に立ち上がろうとするが、

麻巳子 「あ、そのままのまま」

健作、着席。

麻巳子、向かいに座って、

麻巳子 「垣田店長から話は聞いてますよ。私、あの店の行きつけでしてね」

健作 「……あの、俺、ずっと騙されていたんでしょか？」

麻巳子 「妙な質問ですね」

健作 「あの日々は嘘だったようには思えなくて」と、懐から写真を出す。

健作と清香のツーショット。

麻巳子 「垣田店長の言うように、彼女が単なる悪女とは限りません。何か深い事情を抱えていた可能性もあります」

健作、写真を見つめる。

麻巳子「愛は善悪の二元論では語れませんからね。ただし、褒められた行動ではありません」

健作「それは、はい、そう思います」

麻巳子「でも怒りはないわけだ。愛は深い」

健作「知りたいと思います。清香のこと」

麻巳子「知りたくない事実でも？」

健作、麻巳子をしっかりと見つめ、確かに頷く。

麻巳子「わかりました。いいでしょう。お受けします」

健作「ありがとうございます」

と、頭を下げる。

7. 道（夕）

人気のない通り。

清香、全速力で逃げている。額には汗、息を切らし
ている。

すると前方から人影。

清香、思わず立ち止まる。その顔は引きつっている。

（おわり）